



和氣清磨
三代記
本朝錦繡談圖會

7

^13
3941
1



門 八 13
號 3941
卷 1

一多めり 五十六

口ナ廿四

本朝 錦繡談因縁序

翻首 錦繡談

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈



人性本善也從五教之動以善或變
惡正或化邪云上古

孝謙稱懷帝之御宇有惠美神藤友

弓別道鏡者 天皇愛色深觀之道

鏡遂生齋衣 天位心 帝上物許之時

大月帛肅冬序

三

有和氣清庶者精忠不惜死累

守依幡宮神託以挫姦凶而合天地無

窮之皇緒 光仁天皇即位急徵

清麻呂任官一屬職業每到神妙

桓武天皇之時分貴賤之姓氏又勸 帝

宜万代不易之皇都 宜為造宮方丈以

本京不遷他邦矣又建寺社令護

國祚遷武部御旅山川開墾田惠民

公之傳是國史取法為人高直匪躬

之首又生女兒廣岳者貞順若操世嗣

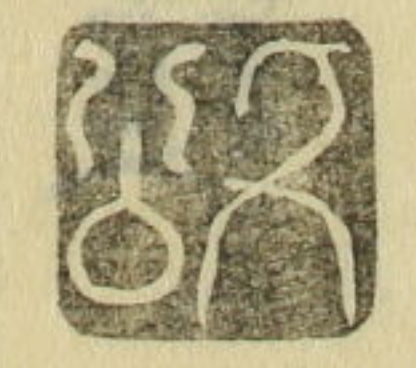
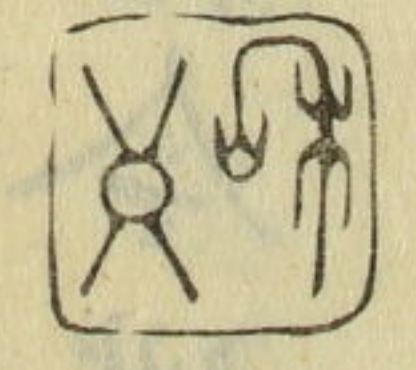
之今他田東羅列史編公一代事跡五卷

紀維貞顯之曰本朝神編法讀公之德者

古來不為少孫百川曰和博無雙
和氏忠路曲言永曰忠烈盈天地功名傳
四海今恭圖千歲之善影
勅贈正一位護皇太神高輝億兆民
無不共蒙公之解澤可仰崇哉

安政六年己未睦月

和兼久公



和氣清磨卿



斤言定

乾坤

一奉捧

大陽

貞婦廣虫

紀維貞



本朝錦繡談圖會總目次

卷一

皇帝造盧遮那佛
姦臣謀得繼朝政

新殿春色巫山夢

卷二

妖僧辱詔昇禁閉
奸臣失寵企叛逆

捕猛大暗逐素懷
逆徒湖西蒙天誅

卷三

奉勅忠臣使字佐
引美女配河伯

原奏直言為謫客
懲戒老巫得孝子

卷四

二僕懇仕語旧恩
雨凌茅屋會謫姊
再使字佐紉神宦

暗打無賴救節婦
謫客勅免僧勅勤

卷五

感得神告登高雄
豫知内謀量安穩
遷都長岡及平安
總目了

修補水利掘河泉
不釁又令伏逆黨
英名千載夷四海

總論

此物終久後日本後紀大日本史大系圖之序叙書本朝紀
運錄中かゝる編纂事記を介するに當りては其を以て
しむべき多かるるかの小説釋史を以てしむべきに
しむべきを弁するの身人とはさしむべきを以てしむべき
を以てしむべきを以てしむべきを以てしむべきを以てしむべき

ふんちん

東籬主人

本朝錦綉談圖會卷一

洛士 東籬主人輯錄

聖帝造盧遮那佛

聖語云人而無信不知其可也大車無軌小車無軌其何
以行之哉又云信者人之大道也仁義孝忠出於是也
昔人皇四十五代聖武天皇と尊稱し奉るは
文武天皇の皇子として御母夫人藤原宮子等公之則
元正天王文武御位より。天日嗣の禪を受くを以て養老廿四
年九月御即位す。原來御聖德厚く万民を撫育
し給へ物々。五雨十風時と違はず四海浪平くも。技を以
らるゝ大御代かゝる。殊更當帝。深く佛法三寔小皈依し

二十一歳なり太子小立せたまひ。今年三十二歳御受禪あり。同日御即位あり。聖廿一年改元あり。太平勝室九年なり玉ひ。先帝聖武天皇小太上皇の尊踰と奉りたまひ。天下の政都先規小順。仁惠と四海小布施あり。万民鼓腹。散樂の思たま。実や生者必滅のあり。太上天皇太年御不例。新帝殊。感應。惱し。諸社諸山小祈願加持。典医博士日夜。参集あり。和漢の神丹と奉。聊その驗切も奏さ。終小天平勝室八年五月二十日。御壽五十六歳。崩あり。原来佛門皈入。崩御の前御飾と下あり。御法号と満勝と号あり。帝王御落飾あり。此帝あり。

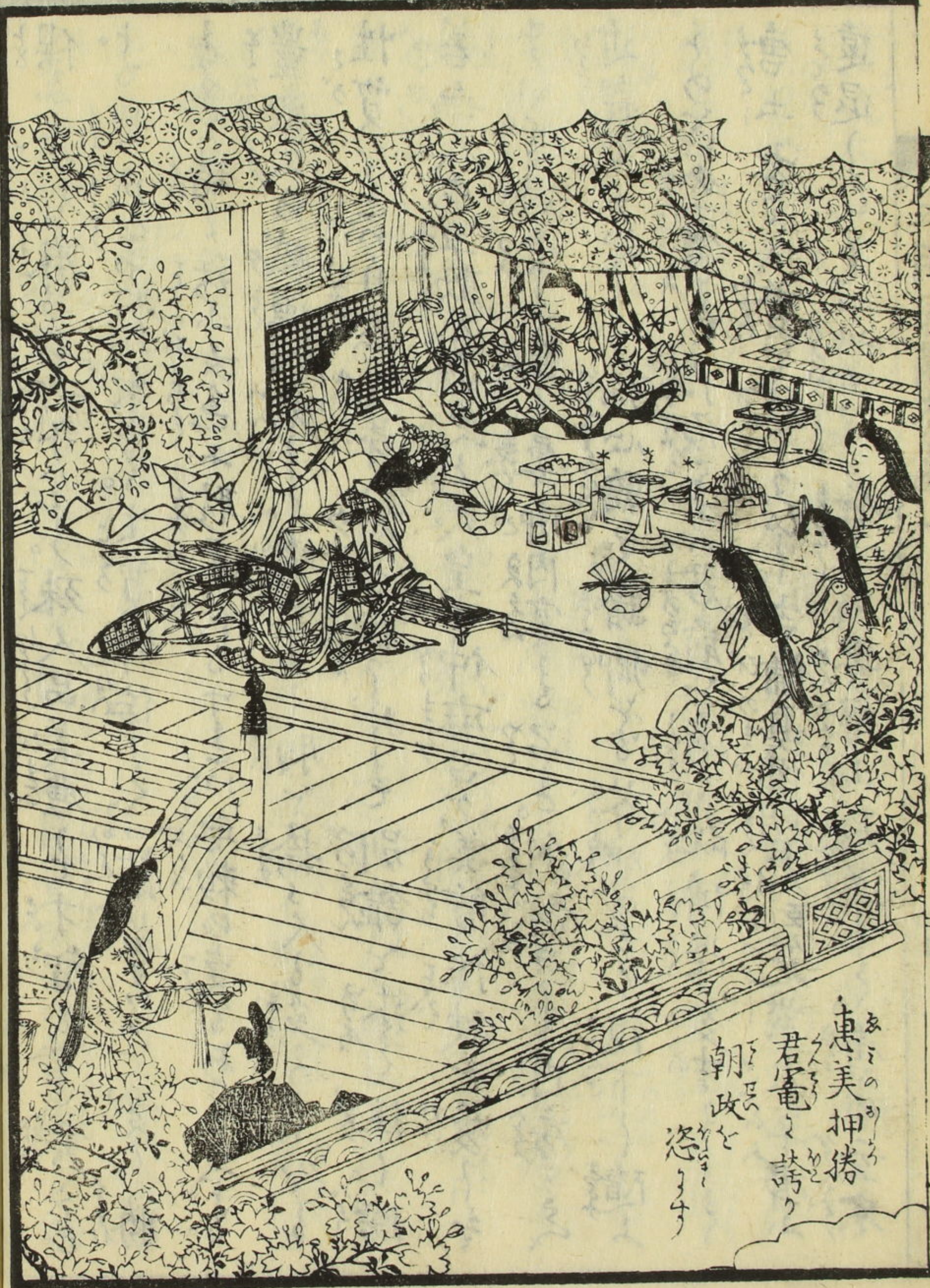
始あり。則東大寺の軌佐保山奉り。諒簡も果あり。聖年改元あり。天平宝字元年あり。先帝の御遺勅あり。天武天皇の皇孫中務御道祖王あり。皇太子小立。弥上下万歳と唱あり。四民安堵あり。干時補佐羽翼の臣左大臣。此公敏達天皇六世の孫美好王の御子あり。井手の左大臣と号あり。才智万人小秀卓あり。和漢の典籍と暗記あり。殊小和歌小玄妙あり。上一人下万民。惜あり奉り。右大臣豊成公あり。中將相。從一位武智麻呂房前の御子。性年。中將あり。頃宮。庭文余あり。異形ありの者徘徊。男女奉仕の輩あり。致あり。

豊成太安うす思ひ或夜一箇の魚肉と庭上小散く潜小こま
 と穴窺ふ。察知の如く彼怪物出東南の肉と喰ふ處も。豊成
 透さず走寄る。忽一太刀切伏し。火炬を命く。熟視バ年老
 狸の類なる。帝殊く感感まりく。米地と加恩し。且つま
 室女と具し。内の女房紫の上と。風姿容色殊り
 勝るを賜ふ。中将姫の母公なり。此件相二代記ありか。智勇兼備の公なり。今天下の
 政一人小飯とも。少も私の争動なく。上を敬し下を哀し。仁慈を
 一身く。政務を執行する。諸臣中々恐縮し。下民挙く。篤行を
 感佩す。

新殿春色催春夢

大納言仲麻呂卿と。則右大臣豊成公の舎弟うすて。

俱小武智麻呂の御子なり。殊人品美。豊と才智も。秀色
 豊成公の似氣なく。生質妍俊。己小方と。愛し勝
 まるを婿と。殊小女色小耽り。良もす。無頼の交もあつても。
 豊成公の威徳小免し。胸を捺し。人も多し。か。も
 性質なま。自然兄弟の間も睦し。別館を求し。任し。傍
 若無人の争動なる。と。天皇へ仲麻呂が美質。倭諛を愛し。を
 す。筈遇常小厚く。屢内宴も召す。刺何日。内房と。へ
 近親と。弥心驕る。諸卿も芥塵の。視下し。隨ふ
 唐土を。入。誉を。残し。吉備直備朝臣。筑紫太宰府小
 遠退し。是。此。御時。唐上小。安禄山。叛逆し。唐の玄宗



惠美押巻
 君電々詩り
 朝政を
 恣にする

帝と蜀の國に追退禄山唐國を握掌とすも人民大に逐鹿し
いひ及令一朝の勝利を得も臣とて君を廢すを皇天爭り
許し給ふ遂に忠臣の如く禄山足を置ふ所なく皇國乃
鎮西に襲來んに必定かゝり詞を互ふ衣襟を驚し
之が防禦に吉備真備の如く彼朝目へ異朝に於て種々
その智量と計り絶倫なるを覺知するの念吉備大臣が防
禦と聞かば唐兵無算と上陸なすふと見が如く内奏
しより叔を吉備を防守の命せらる斯る君を
得るるといひ殊小畜類の尺一奉る大臣も及ぶ事か
とが皆こつと上を顧みて仲麻呂小嬌諛り大臣の如く
がら金帛を得るを日々山の如く豊成公のその無頼と

悲しむ。又却内寵を怨り人にも身と戒む當ふ君の非と奉
る。似し。殊更一々なる。却寵愛を羨る身と婿如の叢
慮あらんも賢し。心中煩をせむい折も哉他託ち。身と
退ふ如すと専慮をわらる。仲麻呂の更し諱憚るの心
なく。驕侈日多増長。倉卒に修理職に命じ。こが館の隣宅
と。无体な推を以て贖得。此地に美嚴の殿舎を作し。如
時威し仲麻呂の命なき。修理の官人も禁官造立誓固り
し。嚴重く王に命じ。日夜怠慢を戒し。不日殿閣造立
し。殊小善美を尽せ。容靜。更し鳳閣小等し。階下
後山泉水と玉を造り。楓櫻數百株を栽文ら。吉野龍田の
春秋を極る。あゝ又天武天皇の皇子舍人親王の御子

大炊王おほいけのみこ。御歳二十年みとしはふたじゅうねんふかきやうもいふも。親王みまもなせり。最もと寶たから々々。坐ましまり。仲麻呂なかつまろ思おもへ子こ細こやはりくんみ善よくまのま王み。咫尺しやくせき。事ことふふ触ふ物ものふふ託たくす。金帛きんぱく珍めづ器ぎと奉ほうまま。大炊王おほいけのみこハ左ひだりにま。威い勢せいああるる仲麻呂なかつまろのの斯かくく懇こん乃の會あひあひあ愛あひあ。無な二にものものもも思おもひあ。此こ般はん新あらた殿どののの庭にわ櫻おう閑かん落らくの時とき候を傳つたへつ。可か者ものとと白しろ雲うみとと不ふ異い。よよううくく花はなのの宴うたげとと設おくく。大炊王おほいけのみこととししへへ奉ほうまま。小こ王みハ朝あささきき。御出みでかかるる。新あらた造ぞうのの美み禰ねとと山さん海かいのの珍めづ者ものととりり。乃の饗あ饌ぜん。小こ一いちううああずず歡かん喜ぎしし。終しゆう日にち種たねのの持も鳥とり永ながくく春はる日にちもも西せい山さん。肴さかならら。數かず株かきのの櫻おう樹じゆ乃のりり。金きん燭しやく數かず百ひゃくとと點てん。殿どの上かみらら彩さい色しき。花はな燈とう所ところ狹せままま。掛か連れんるる容よう動どう。又また一いち層そうのの春はる景けいととまま。一いち刻こく價げ。千せん金ごんもも物ものふふ。月つき宮みや殿どの乃の形かたち容ようもも。ああままりり勝かち過へととりりええりり。

かかくく折おりり仲麻呂なかつまろがが一いち女によ照あ姫ひめとと。破やぶ此このの容よう貌ぼう風ふう姿さ。んんめめ。唐たう土どのの西せい施せ貴き妃ひもも争まりり。徐じゆ々々容よう々々とと貴き前まへふふ。句くいい盈えいくく愛あい想そうしし。遙えう長ながくく後あと小こ鬼おにくく。徐じゆ々々容よう々々とと貴き前まへふふ。句くいい盈えいくく愛あい想そうしし。遙えう小こ隔かき額がく突つべべ。仲麻呂なかつまろ王み小こ啓けいくく。不ふ束たすのの賤せん娘むすめなな。筑つ紫し琴きんのの一いち曲きよくとと奏そうしし。聊りやう々々真まとと添そ奉ほうまま。大炊王おほいけのみことと愛あいでで。敢かんとと宣のたまへへ。侍ま女によ玉たま装ままま。十三じゅうさん弦げん琴きんとと懷なつくく出で。姫ひめのの膝ひざ下したにに押お直ちかすす。照あ姫ひめいいもも恥はじじひひなな。鐵てつ手てとと伸のびび律りつ呂りよとと正ただしし。鶯うり声こゑとと想そう夫ふ恋こゝろりり。曲きよくとと奏そうすす。弦げん音おん斷た續ぞく序ぎよ破やぶ急いそのの度どふふ合あひひ。ささままがが為なるる。庭にわ上かみのの櫻おう梢さか。鳳ほう鳥てうもも來き棲すまりり。岩いわ疊たたかるる。流なが泉いづみもも泉いづみ。泉いづみ躍たぎりり。怪あやししまるる。聽きてて。一いち曲きよく彈ひ畢はせせ。玉たま殆たいていどど感かん賞しょうふふ堪たまま。ええ來き。姫ひめのの容よう色しきふふ愛あいまま。上かみ。想そう夫ふのの唱なう歌か。清きよ音おんとと艶えん奏そうとと聞き。唯ただ悅よろこ惚ぼととりり。このこの時とき。

更さらふ上うへ器きとと舉あげ。一いつ盞さんを吞のみ。姫ひめも賜たまひ。あまふ無なく。まゝ。數かず盃はいと傾かげ。ままふ。數かず刻こくの長なが宴えん。王わうも珠たま更さら沈しん醉すい。ななく。い。ままく。穉ちの上うへ。ふふ。腕うで枕まくら。最さい後ごもああまま。目め。仲な唐たう。まま。と見み。侍し女にょも命いのち。密ひそ。ふ。盃はい盤ばん食じ器きと徹てつ却せつ。と。四よ辺へんと清きよ。ふ。掃はき除ぞ。綾あや羅らの上うへ。装まと王わう。ふ。袍ほろ奉ほう。と。まま。く。其その座ざ上じやう退たい去そ。少せう頃けいああまま。王わうへ目め覚さ。うう。い。人ひと。や侍し。と。召よ。まま。ば。諾だくと答こた。一いつ婦ふ人にん白しろ金ごんの天あま目め。ふ。不ふ熱ねつ不ふ冷れいの湯ゆと。と奉ほう。王わう醉すい眼がんと活か。ええ。うう。人ひと。別べつ人にんを。ず。照てう姫ぎ。なな。王わう大だい。と。朕みづか自みづか亭てい。ふ。睡すい。まま。ひひ。うう。未み新しん殿てん。ふ。醉すい。即すなは。ち。恨うら。まま。く。風ふう。敏みん。館くわん。なな。ん。宣のたまへ。照てう姫ぎ。へ。徐じゆ。辞じ。ふ。父ちち上じやうの申まを。うう。の。夜よ。も。いい。く。剛ごう。結むす。と。六む。時じ。歸かへ。路ぢ。も。心こころ。安やす。く。うう。若わか。も。御おん。目め。覚さ。なな。らら。此こゝ。糸いと。申まを。啟あけ。く。最さい。荒あ。疎そ。ぶぶ。く。寢ね。殿てん。ふ。夜よ。の。寢ね。具ぐ。と。偷ひそ。か。入い。侍し。へ。御おん。心こころ。安やす。ふ。夢ゆめ。結むす。いい。うう。ああ。やや。と。申まを。うう。いい。の。

希まれり。の。残のこ。り。御おん。夢ゆめ。を。見み。うう。らら。ん。王わう。と。伸の。びび。うう。らら。ん。王わう。子し。も。満み。ちち。りり。と。後のち。一いつ。至いた。十じゆ。の。厚あつ。喜き。ふ。謝あや。まま。るる。也なり。と。志こころ。すす。と。又また。女にょ。房ぼう。等らう。ああ。まま。と。ああ。れ。中な。ふ。と。許ゆる。けけ。りり。と。不ふ。在あ。らら。ず。ふ。妻つま。が。父ちち。の。仰おほ。せせ。高たか。貴き。なる。君きみ。と。倍よ。目め。の。女にょ。童どう。と。奉ほう。仕し。へ。憚おそ。れれ。ああ。るる。妻つま。一いつ。人にん。宮みや。仕し。なな。りり。何なに。夏なつ。の。仰おほ。せせ。と。聊いさ。と。違ちが。背せい。奉ほう。まま。うう。加か。まま。の。令しるし。が。はは。赤あか。心こころ。隅ぐも。をを。仰おほ。せせ。りり。奉ほう。てて。つつ。と。まま。つつ。と。袖そで。りり。と。面おもて。とと。らら。掩おほ。ふふ。王わう。子し。の。完くわん。尔に。と。笑わら。うう。いい。と。と。と。厚あつ。喜き。を。空くう。くく。らら。まま。て。今いま。一いつ。睡すい。と。快た。くく。と。んん。と。と。を。許ゆる。業ごう。内うち。にに。突つ。と。まま。うう。の。飄ひら。々々。と。踏ふ。踏ふ。處ところ。も。定さだ。なな。りり。是こゝ。に。怒いか。りり。と。御おん。手て。を。拿と。りり。王わう。子し。も。姫ひめ。が。掌てのひら。を。固かた。と。手て。握にぎ。りり。カカ。と。まま。と。寢ね。殿てん。へ。入い。りり。巫ふ。山さん。の。夢ゆめ。と。結むす。びび。うう。らら。んん。奸かん。臣しん。謀ぼう。得とく。縱た。朝あさ。政せい。大だい。炊か。王わう。の。是こゝ。日ひ。より。更さら。ふ。帰かへ。館くわん。も。なな。く。至いた。りり。子し。深ふか。く。照てう。姫ぎ。と。御おん。愛あい。ああ。つつ。て。

只宴樂と諱くし。仲麻呂心計成就と意中ふ笑く。皇帝ミカドも
 奏まゐり。新殿と王子みこを奉り。照姫と以て廟中みやなか小備せまひんと願ふ。
 元二と申まをす。勅免しやくめんあり。則新殿と大炊王の御所みよとす。
 移徒うつりかへの式しきを行なひ。而しかく又照姫と入真いりまことの礼れいとす。尚なほか佳祝けしきと
 諸卿しよけい小拜趨こがやうあんとを促うながす。諸司しよし百官ひやくくわん我不後われなきと金帛きんぱく
 と捧たもぐ慶賀けいがし。是こゝが為なり門前かどまへ市いちとあり。後仲麻呂のちのち帝みかど乃すなはち
 御内宴みうちんえんふ召よす。度たびと少すく。大炊王の篤行とくこうと称なづけ。皇太子道
 祖王みちのすけの所行しよかうと惡邪あくじやふ諛うそと奉り。既すなはち小招こまねり。諸臣しよじん大炊王
 隨喜ずいき奉まり。以もつ。皇聖德すうせいとくを察みり奉まり。善よきと後のちく惡わるく積たり
 帝みかども御ご電でん凌りやう厚こうき。仲麻呂のちのちの女めと配はり。王みかど乃すなはち一方
 乃すなはち哉や思しふ。一日いちにち豊成公ひよんじやうこう以下いげ宰相しやうさう等らと召集しよしふせ。今いま般ぱん深しん

敵てき慮りす。皇太子道祖王すうたいしだうそわうと廢す。舍人しやにん親王しんわう御子ごし大炊
 王みちのすけと皇太子すうたいしと立たり。勅しやく誡じやうなり。吉よきと告つぐ。諸卿しよけい大おほく
 驚おどり。誰たれか勅しやく答たうす。人ひとなく。密ひそか面おもてと見合みあひ。諸卿しよけい大おほく
 右大臣みぎのちじん豊成公ひよんじやうこうの萬よろこく。仲麻呂のちのちが結搆けつたうと察みり。内
 奏うちまうふ。心こゝろ中なかつ思しふ。席せきを進すすめ。正ただつ。倫言りんげん謹じんむ畏おそり
 奉まり。衣え深ふかき。敵慮てきりす。手て中なかつ事ことを察みり。皇太子
 の御治定ごちやうぢやうぢやうハ先帝せんていの御遺ごい勅しやくと申まをす。殊こと更さらに今日けふまで何なにの御事ごじ
 と坐まり。倉卒くらそつ小敵慮こてきりと合あはせ。御遺ごい誡じやうと破やぶり。
 平へいん吉よき天下てんかの人民じんみん自みづかり。不平ふへいの心こゝろを懷いだく。条じやう近頃きんぎやう恐おそ入いり。
 希まれく陛下てんか敵察てきさつと重おもく。尚なほ和漢わかんの例れいを述のす。
 諫かん奏そうし。奉まり。帝みかども流石りやうせき小豊成こひよんじやうが理言りげん推おしり。勅定しやくぢやうも

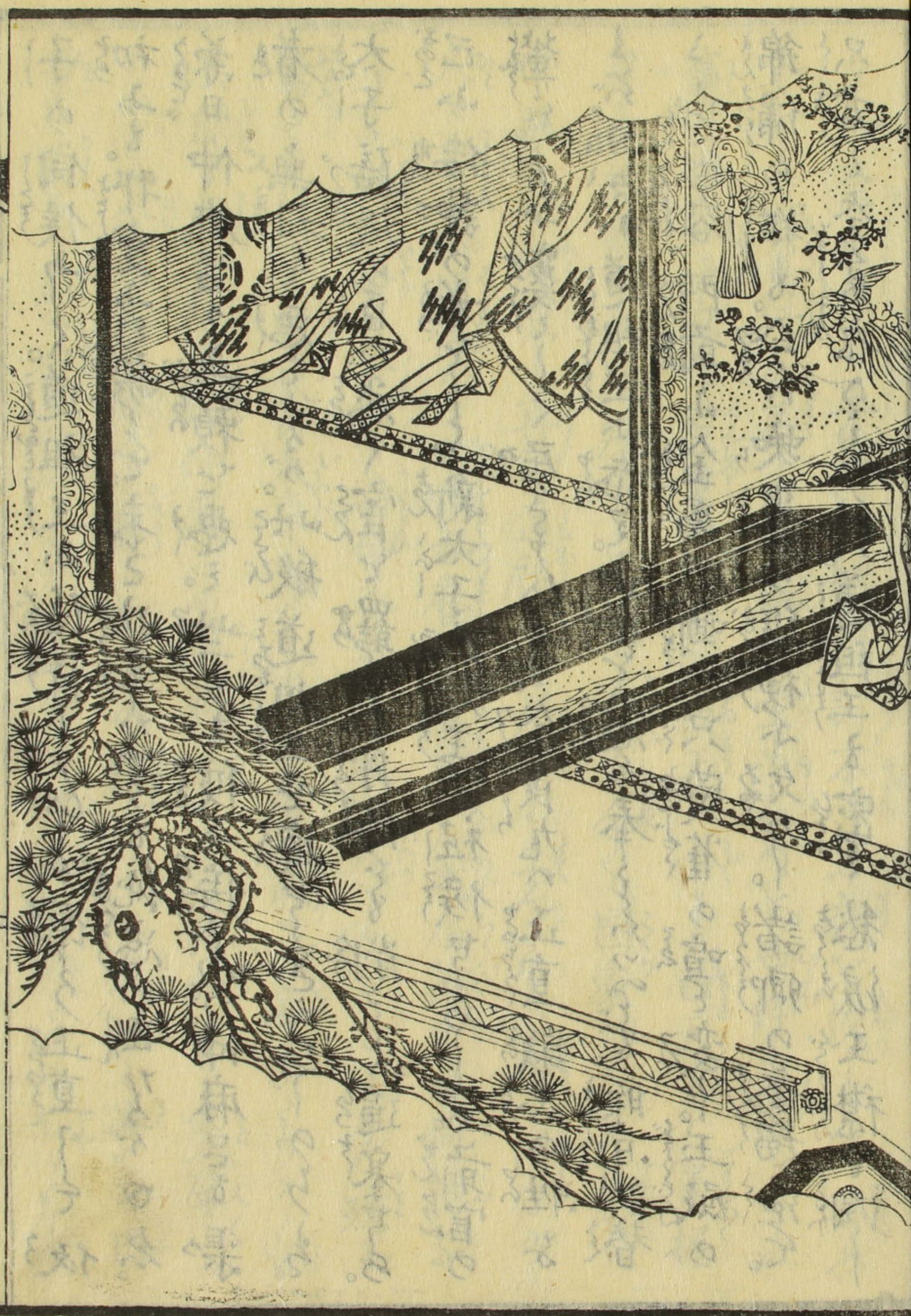
かくや在らん再び何り倫言もなき。突と帳中へ入る。仲磨
 の豊成の諫奏と殊ふ无念ふ思ふと久も正道の辞もなき。
 其日の食議の少ふく。これ悪吏千里を。諸寮諸司の官
 人まで眉と顰む額ふ斂たる。都の人民も聞きの種々同絆
 喧へ皇太子道祖王の明反ふの条を聞召すと。情御意り
 思ひやう。朕名も先帝の仁愛ふり。かく太子位ふ果と雖も。
 今帝の御形勢且仲麻呂君實ふ誇る。皇統と云妨障申
 時勢適帝位と踐とせ。政事も渠が随心もひ。後令仁
 政と布施も。渠がくも隔とせ。却て邪の政道とある。先帝
 の不孝末世の耻辱不如幸ふ退位せん。則右府豊成公
 と召と朕聞帝大炊王と云。太子とん。敵慮なると。卿是と

諫奏し奏する。厚責満足に至る。朕元來才
 短く智小疎く。殊更性質愚弱も。天下を保るの力なき。
 愁い。近仕の輩も常ふ告り。帝賢も之を知り。百も
 こそん斯く。詔あつる。今太子位を廢する。亦情が似
 ともども。実ち御仁恵り弥深きなき。卿再ひ奏し。つぎ
 する。敵慮のゆふ。太子と立奉ると宣へ。豊成公の御心中と
 忍察敷行の涙と流し。諾も做らば。道祖王も御袖と濡し
 ろい。嗟嘆愚なる豊成。流る清か。待も月はやどら。深か
 野い。い。詔そと宣へ。豊成漸く涙と拭ひ。皆臣が罪
 ろ。更ふ陳する。辭ふ。有然者少。頂尊慮のゆふ。事成
 奉る。猶も愁涙とどめ。追討御前と退出て。真内へ

奏す。奏見受と申す。帝御内宴の折節とて物憂思く女
房と以て其条と問せらるる事あり。仲麻呂も宴小侍とて今日
道祖王より豊成と召さるる事あり。陛下奏す。知と歡問
す。猶も不敬の事あり。失錯とて遠離さるる事あり。
奏す。帝玉座不出さるる事あり。仲麻呂も御簾後小遣とて
豊成護とて。過日太子と廢し玉之勅と。否と奉り。臣罪万死と
以て免るる事あり。及みず。併に遺命とて金見せらるる事あり。然るに今日道
祖王臣と召さるる事あり。兼に御性質御患弱と愁さるる事あり。御仁
慈とあり。詔の深と暗。平大内悔し奉り。希ふに速小大炊王と
と蒙り。初に詔の深と暗。平大内悔し奉り。希ふに速小大炊王と
以て。皇太子の宣下あり。奉り。天顔とて小瘳

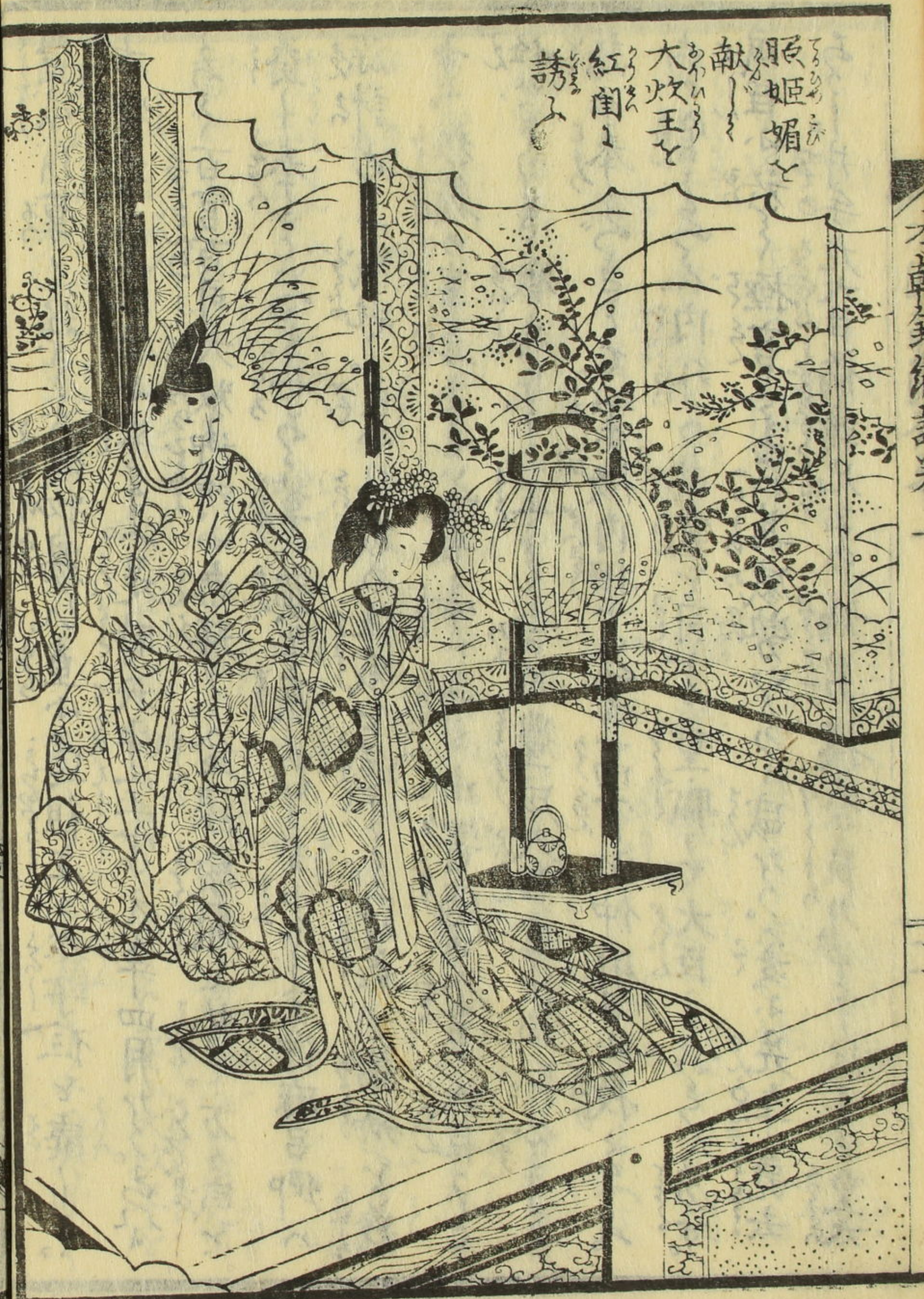
豊成の厚く被物賜ひ。直小道祖王が太子位と廢し。大炊王と皇太子小立とす。是時天平宝字元年四月なり。是日
百官百司大炊御所小奏拜し。金銀綾羅と持て。万々威と
奏し奉り。心あり。華の頭と疾し。少く。仲麻呂卿の
深計あり。成就し。己の外戚の位威を退し。弥益小諸卿と茂
や。狼籍の事多し。帝の尚も御電遇の余り。大臣と
任せり。睿志あり。正しく。舎兄豊成大臣小守り。必し
諫め奉り。ききとて。紫微内相とす。高官と。仲麻呂小授とす。
去の官とす。内外の武官と司り。重職と。大臣も。芳す。
武臣小。擢官とす。其威勢と。盛なり。爰も先年薨去
あり。井手大目橋諸兄公の嫡男。橋本良丸。皇太

木月帛清公卷一



照姫媚と
 献
 大炊王と
 紅閨と
 誘ふ

才草集新言卷一



子の伺候や。道祖王みちすぢの陪從へいじゆよりいひか原もとより正直まことにて
 初はつも邪よこしま直ただの誘よそひにて。未まと壯年さむらいなれども純忠じゆんしゆの臣おんなるが由よし。
 兼かみ日ひ仲麻呂なかつまろが無頼むらいと悪わる。世よ少すくも彼か小倭こわにハ仲麻呂なかつまろも渠か
 者の無礼ぶらいと悪わる。世よ般はん道祖王みちすぢと廢やぶせしむる。月つき俸ほうも削くる。逼おぼ塞そくせらる。
 太子陪從たいしへいじゆの臣おんの悉しつく官くわんと罷おとす。己おの小倭こわ諛うその者もの。新太子あらた大炊王おほい小祖こ侯こうせりやう。前官ぜんくわんの
 輩たぐひ。己おの寡くわく居い。奈良丸ならまるの正直まこと忠ちゆうの性せいを
 且かつ。昨日きのう小替こかへ。道祖王みちすぢ小赤こあか。御心ごこころを慰なぐさめ奉たてまつる。昨日きのう小替こかへ
 御形容ごけいよう。門前もんぜん小金馬こんまの嘶うなりも。只ただ變雀へんさくの喧わめと變かへト。玉殿たまどのの
 錦備にしんべいの襪わも。今いまの坎巢かんすうの級ぐわい横よこ小文こぶん。諸卿しよけいの参まゐり絶たて。
 只ただ君きみと奈良丸ならまるのひな。道祖王みちすぢも密ひそく愁しみ涙なみだ玉たま襟えりを洩はなす。

奈良丸ならまるも王わうの御心ごこころ裡想計りしやうけい不覚ふかく小袂こたもとと紋いづが借思かかふ
 斯いかづり御駕行ごがやうの玉たま。一ひと點てんの曇くもも在あり。毎まい日にち小廢こやぶる。事こと。あま皆みな仲麻呂なかつまろ君きみ審みふ倦う。大炊王おほいと帝みかど。己おの天下てんかと掌て握わ
 々々ん結構けうかう。則すなはち叛逆はんぎやく。不如たがひ一命ひとことと國家こくがのく々々捨すて。
 仲麻呂なかつまろを誅戮しゆりやく。再またひ道祖王みちすぢと太子たいしをく々々密ひそく同志どうしの
 人ひとを誥令ごけい。同侶どうり。大伴おほ古磨こま。大野おほ東人とうじん。忠義しゆぎの臣おん荷擔かたんふ
 猶なほも奈良丸ならまる忠士ちゆうしと誥令ごけい。豊成公ひよんせいこう反かへる。聞きく。其間そのま。所ところをく々々抑おさへ。仲麻呂なかつまろの狼藉らうせき。余あまも。其間そのま。所ところをく々々更さらふ。兄弟けいぎの移うつり。渠か他たも。異ちがふ。内
 審みふ。彼か非ひ。是こゝは。他たの正ただ。彼かも。邪よこしま。

卿等。王の為不彼と誅得とも。却々帝の逆鱗より。王の壽
 と縮ち。忠義の水泡となり。末世の記録逆賊の彼名と残る。心
 凡物不栄枯あり。况や不義の富貴不於や。強々威なる向んわ。
 夏虫の燈火入ら。若火の表と俟とも。蠅の羽搏りも滅する理。
 所謂盛なるときも。制し。衰るときも。制せらる。不如衰枯の時と俟
 と種く得失と終る。結構と止あり。太良丸もを理は伏
 一。元念なきも。教戒と年々専ら時勢を臨伺ら。あつる不仲
 麻呂。つゝ。世を安出。直々参内。直奏。解官
 致仕。己ん事を願ふ。帝大少欽。驚と。ひ。故を問せら。則奈
 良麻呂。古麻呂。東人。う。徳謀。不。尾。鱈。と。附。會。と。徳。是。全
 臣。君。置。不。よ。高。官。不。居。す。が。ゆ。ゑ。な。喬。木。風。不。倒。る。比。喩。

不如致仕。剃髮。深衣の身となり。人の猜と避ん。空泪
 と拭ふ。帝大。逆鱗。直々。禁衛の武。勅。道祖王
 奈良麻呂。古麻呂。東人。が。亭。不。向。一時。搦。囚。獄
 司。小。命。禁。獄。道。祖。王。と。始。め。太。良。麻。呂。寺。三。人。一。度。の
 糾明。及。不。悉。死。刑。不。處。悲。か。る。由。事
 不。加。仲。麻。呂。内。奏。右。大。臣。豊。成。公。の。身。重。職。不。有
 輕。卒。奈。良。麻。呂。亭。不。殊。更。敷。冠。密。語。な。す。
 不。疑。惑。の。至。少。頃。右。府。を。罷。筑。前。博。多。の。津。小。探。頭
 一。別。筑。紫。の。果。左。近。一。人。嗟。呼。此。公。左。近。鳥。実。の。力
 時。の。横。災。の。途。々。辺。境。不。下。全。

仲麻呂の胸間より出く。獅々身中の虫とやいふと。是を惜み
 彼と惡し人心さうふ穏かき。あるまじく仲麻呂の眼上の瘤と
 拂除し心地し。是よりハ猶憚るなく。我慢日々小増長し。尤
 大臣小昇進なり。且内奏がやう。速卒小天皇御讓位め
 つ。天平宝字二年八月。皇太子大炊王御受禪す。即日
 即位と行り。先帝孝謙と高野天皇とを禘す。かく右も
 天皇ハ御名のうて。朝政賞罰も。高野皇の御隨意し。う
 既小仲麻呂と。太政大臣從一位小推任叙し。且仲麻呂も
 つ。人の大織冠鎌足も若く。万民と惠み。將々の行い美し。
 今武門の棟梁とて。邪と禁じ暴と押へ。乱と結め。仇と勝る。
 多頭賞し。仲麻呂と改め。押勝と名乗。又姓の下小惠美の二字

と。藤原惠美押勝と名乗。せうひ日夜御審愛人目と憚り
 かつ。押勝も御外戚の権勢と震ふ。公卿とも己の從僕り
 じく見下し内外の政事も心の隨ふ執計。ゆゑ百官百司日夜
 小安徳心もなく。只薄氷と踏の危と懐く折る。先帝の皇后光
 明皇后も。何れも御不例おま。終小天平宝字四年六月
 御年六十歳。薨る。上下し。眉を嘯む。則大和國
 佐保山なる聖武帝の御陵ふ。葬り奉る。

本朝錦綉談卷之

